

国際会議報告

1. アメリカ科学哲学会に参加して

松本俊吉（東海大学）

2年に1回開催されるPSA (Philosophy of Science Association, America) の第18回大会が、2002年11月7日から9日にかけて、ウィスコンシン州の州都ミルウォーキーの市街にある高級ホテル、ハイアット・レジェンシーを会場として開催された。日本での科学哲学会が新潟大学で開かれたのと、ちょうど同じ時期だ。以下に、私がこの大会に一オブザーバーとして参加した際の若干の見聞録を記すことにする。

私事で恐縮だが、私は2001年の8月から約1年間、奉職先の東海大学から在外研究の機会を与えられ、ウィスコンシン大学マディソン校哲学部に5ヶ月間、そしてペンシルバニア州のピッツバーグ大学の科学哲学センターに8ヶ月間、客員研究員として滞在した。その間に公私こもごもいろいろとお世話になった人たちや、知り合いになった大学院生たちがこぞって今回の大会に参加するとあって、私も彼らの活躍を見て自らを鼓舞しようと再度海を渡った。例えば、ピッツバーグで私がセミナーに出ていた物理学の哲学の John Earman は PSA の現会長、私の滞在を快諾してくださった生物学の哲学の Sandra Mitchell は今大会の実行委員長、また私がマディソン滞在中いろいろと面倒を見ていただいた Elliott Sober は今大会を境に Earman から会長職を受け継ぐことになっている。知己になった大学院生では、ウィスコンシン大学から生物学の哲学者1人、ピッツバーグ大学からは生物学の哲学者2人と心

理学の哲学者2人の計4人が、今回厳しい選考を潜り抜けて一般発表の栄誉を勝ち取った。

ミルウォーキーの街自体は典型的なアメリカの地方都市という感じで、それほどエキサイティングなところではない。会長の Earman 自らが、8月にピッツバーグで出会ったときに、「今度のPSAの大会はミルウォーキーだからあまり気乗りがしないね」といていたほどだ。それだけ誘惑に駆られずに、会議に集中できるというものだ。

アメリカ科学哲学会大会の、少なくとも私にとっての一つの大きな魅力は、アメリカ科学史学会(History of Science Society, America: HSS)と共催で同じ時期に同じ会場で開催されるため、どちらか一方の参加者でも自由に他方の部屋を行き来できることだ。実はもう一つ別に、Society for Social Study of Science という学会も、市内の異なる会場においてではあるが、同時開催している。ちなみに HSS の方は、2年に1回ではなく毎年開催である。参加者数も発表件数も HSS の方が上回っている点は、日本と事情が似ていようか。特筆すべきは、PSA と HSS の両方を掛け持ちで発表している人が結構いることだ。例えばピッツバーグ大学の Paul Griffith は、PSA の “Biological Kinds and Human Kinds” というシンポジウムでパネリストとして報告し、HSS のエソロジーに関するシンポジウムではコンラート・ローレンツについての報告をしてい

る。同じくピッツバーグ大学の Peter Machamer は、PSA では反事実的条件法と因果性に関するワークショップでパネリストとして報告を行ない、他方で HSS では Steve Fuller によって組織されたトーマス・クーンの残した遺産について議論するワークショップで報告している。私は主に PSA の方のセッションに出席したが、HSS の方にも若干顔を出したので、それについても後から簡単に報告することにしよう。

今回の日本からの参加者は、私の他には、PSA 関係では名古屋大学の伊勢田哲治さん、ピッツバーグ大学大学院哲学科に留学中の岸田功平さんで、今回は発表者はいない。ちなみに HSS の方では、私は少なくとも 5 人の日本人に会い、そのうち 2 人は発表を受け持っていた。

セッションは、シンポジウム、ワークショップ、一般発表を含めて全部で 36 個あり、総発表数は 146 本。分野別に最も多くのセッションを開いているのは物理学の哲学で 7 つ、次に因果性に関するセッションが 6 つ、生物学の哲学が 5 つ、神経科学ないし心理学の哲学関係が 2 つ、實在論 2 つ、化学の哲学 2 つ、ジェンダーや科学の社会的側面に関するもの 2 つ、その他科学的推論の性格やモデル構成、バイズ主義や統計学的方法など広義の科学方法論に関わるものを一まとめにして全部で 8 つあった。概ね、わが国の科学基礎論学会と似た性格のものだといっていいただろう。これだけ多くのセッションが 3 日間に凝縮して開催されるため、常時大体 6 つの同時進行セッションとなった。結果として、どうしても出ておきたいセッションが同じ時間帯に 2 つも 3 つもバッティングしてしまうことになり、非常に歯痒い思いをした。

私自身は、在外研修中の研究テーマとして進化論の論理を選んでいたこともあり、主に生物学の哲学関係のセッションに顔を出したが、時間の許す限り他のセッションにも参加した。そういう私にとって最も印象的だったのは、昨年他界した Stephen Jay Gould の哲学的な貢献について議論する “Stephen Jay Gould: Evolutionist and Philosopher” というワークショップで、Elliott

Sober の司会の下に、インディアナ大学の Elisabeth Lloyd、ミネソタ大学の John Beatty、コロンビア大学の Philip Kitcher という 3 人の生物学の哲学者が、それぞれ “Exaptation and Function” “Replaying Life’s Tape” “Evolutionary Theory and the Social Uses of Biology” というタイトルで報告したものだ。これらは凡そ、「汎適応主義 panadaptationism 批判」「進化史の偶然的性格 contingency の主張」「社会生物学批判」という、Gould の仕事の中で哲学的に影響力の大きかった三つの側面について、それぞれのテーマに造詣の深い哲学者がコメントするというものだ。Lloyd は、Daniel Dennett が『ダーウィンの危険な思想』の中で展開した類の、Gould の適応主義批判に対する適応主義者からの反批判に対して、Gould を擁護しながらも、より精緻な用語法の確立の必要性を説き、「適応 adaptation」「外適応 exaptation」「スパンドレル spandrel」の概念 つまりその有利な機能のゆえに自然選択によって選択され現在まで保持されている形質と、かつて有していたのとは異なる機能をその後獲得し現在はその新たな機能のゆえに適応的となっている形質と、以前の適応の副産物でそれ自体は元来機能を有していなかったがその後何らかの適応的な機能を獲得した形質とをより厳密に使い分ける必要性を指摘した。自然選択の単位の問題に関して彼女が発表している論文を読んでもそう感じるが、彼女はこうした混乱した論争の渦中における概念の交通整理が得意なようだ。Beatty は、グールドが「進化史のテープを巻き戻して再生したとしたら現在と同じ結果を再び得ることはないだろう」(つまり、自然選択による進化のプロセスを完全に機械論的なものとしてアルゴリズム化することはできない)という contingency の主張をなす際に、(進化上の)結果の(歴史上の)原因への決定論的依存そのものを否定する強い意味での偶然性の主張(‘replay’ version of contingency)と、「同一原因、同一結果」の原則が物理世界と同様生物界でも成立することは認めるが後者では歴史的初期条件の微妙な差異が結果におけるカオスの予測不可能性をもた

らしうる点を強調するより弱い意味での偶然性の主張(‘narrative’ version of contingency)とを、明確に区別する義務を怠っていたと批判した。Beatty 自身、かねてより ECT (Evolutionary Contingency Theory) を提唱していた人でもあり、明快で説得力あるプレゼンテーションだった。Kitcher の報告は、俗流社会生物学者たち (pop sociobiologists) による、レイプや外国人嫌いといった人間の文化現象の適応主義的な説明のいい加減さ すなわち「生物学の誤った使用」

を、グールドが個別事例の詳細な吟味と批判によって暴いていったところまではよかったが、自然選択の役割を過度に強調する汎適応主義に支配された現行の標準進化論そのものをも書き換えようという壮大な野心をもって「種選択」、「進化の階層構造」や「体制 Bauplan」ということを言い出したあたりから、グールドは生物学者たちの支持を急速に失っていった、という趣旨のものだった。グールドの思考の軌跡を一步距離を置いて丹念に辿る、よく言えば客観的な、悪く言えば傍観者的な語り口に終始したものだ。私は、Kitcher 自身の社会生物学論争への当事者的な関与といったもっと積極的な話を期待していたので、少々物足りなかった。

もう一つ特に印象に残ったのは、昨年の4月に自動車事故で悲劇的な死を迎えたピッツバーグ大学の Wesley Salmon の業績を偲ぶ、“Wesley C. Salmon 1925-2001: A Symposium Honoring his Contributions to the Philosophy of Science” というシンポジウムだ。が、その紹介については当日一緒に参加していた岸田君の方が私より適任だと思ひ、以下の文章をピッツバーグにいる岸田君から寄せてもらった。

「8日15時30分からは科学哲学の多くの分野、とりわけ科学的説明、因果性、確率、帰納、空間・時間の分析に多大な影響を残したウェスリー・C. サモン(1925-2001)を記念するシンポジウムが開かれた。座長のエイドルフ・グリェンバウムが精神分析の哲学におけるサモンの業績を紹介した後、フィル・ダウとクリストファー・ヒッチコッ

クはサモンによる因果性の分析が抱える難点の克服を論じた。サモンは可能世界や反事実条件法に訴えず、物理的概念を用いて“この世界での”因果性を特徴付けようとしたが、その成果のうち因果性の伝播を物理量の保存で特徴付ける戦略を引き継ぐのがダウであり、ヒッチコックは真正な因果過程・相互作用を擬似過程から区別する基準を擁護する。サモンの因果性と説明の理論では確率概念が重要な役割を果たす。確率の解釈には頻度説 (frequency interpretation) 傾向性解釈 (propensity interpretation) など対立する立場があり、サモン自身は頻度説の主張者だったが、“この世界での”因果性の分析で確率に物理的傾向性の要素が混じることを認めていた。ポール・ハンフリーズはサモンの頻度説が傾向性といかに整合するかを論じた。ローレンス・スクラーは時空論の規約主義を論じた。特殊相対論では、ある慣性系に静止した観察者が時空上の点aで放った光が点bに届き、bで放たれた光が点cで観察者のもとに届くとき、aとcの間隔を2で割った中点dがbと(その系で)同時であると定義する。ライエンバッハはこの2という数字を変えても経験的に等価な理論が得られるために規約性が生じると論じた。これは後にデイヴィッド・マラメントらによって否定されたが、スクラーはdとbの両方を通る観察者も時計も存在しえないという点でやはり規約性が残るのだと論じ、会場のマラメントやジョン・ノートンらと激しい議論を戦わせた。」

その他に PSA で私が出たセッションには耳学問ないし単なる野次馬のためのものも含め人間の因果的推論をいかにベイズ主義的にモデル化するか、またコンピュータサイエンティストの Judea Pearl の近年の因果性についての画期的論考に対して哲学者の側からどう応答するかというテーマで企画された “Causation & Bayesian Networks” というシンポジウム (パネリストとそのタイトルは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの Nancy Cartwright による “Causal Diversity”、オーストラリアのマ

クォーリー大学の Peter Menzies による “Graphical Models, Token Causation and Processes”、カーネギーメロン大学の Peter Spirtes による “Inferring Causal Structure: What Can We Know and When Can We Know It?”、カリフォルニア工科大学の James Woodward とウィスコンシン大学マディソン校の Daniel Hausman が共同で発表した “What Does the Causal Markov Condition Have To Do With Causality?”); 人間の本性を生物学的に説明するという かつての社会生物学や現代の進化心理学が取り組んだ(でいる) それ自体は健全な課題を、素朴な遺伝子決定論を前提するというそれらに共通の陥穽に陥らない仕方ていかに今後追求していくべきかというテーマで企画された “Biological Kinds and Human Kinds” というシンポジウム(パネリストとそのタイトルは、英国エクセター大学の John Dupre による “Human Kinds and Biological Kinds”、ピッツバーグ大学の Paul Griffiths による “Emotions as Natural and Normative Kinds”、カナダのカルガリー大学の Marc Ereshefsky による “Bringing the Gap Between Human Kinds and Biological Kinds”); 1920 ~ 30 年代にダーウィン進化論とメンデル的集団遺伝学の「総合」を成し遂げた立役者であるとししばしばひと括りにされる R. A. Fisher, Sewall Wright, J. B. S. Haldane の 3 人の間になおかつ厳然として存在していた学問的関心の、あるいは方法論上の断絶について歴史的かつ哲学的に考察するという趣旨で企画された “The Making of the Genetical Theory of Evolution” というシンポジウム(パネリストとそのタイトルは、シンシナチ大学の Robert A. Skipper による “The Heuristic Role of Sewall Wright’s 1932 Adaptive Landscape Diagram”, カナダのトロント大学の Margaret Morrison による “Population Genetics and Population Thinking: Mathematics and the Role of the Individual”、ユタ大学の Anya Plutynski による “Pluralism in Biological Explanation”、テキサス大学オースティン校の Sahotra Sarkar によ

る “Evolutionary Theory in the Twenties: The Nature of the Synthesis”)がある。が、これらについては紙数の関係で詳しい報告は省くことにする。

あと PSA では、おそらくこれから学会誌にデビューしようとしている大学院生のための企画だと思いが、Philosophy of Science 誌と British Journal for the Philosophy of Science 誌の編集者が登場して、良い論文の書き方を指南したりレフェリー選定や論文審査のプロセスの舞台裏を語ったりフロアへの質問に答えたりするという趣向の、“Behind the Scenes at the Journals”と名付けられた「教育的な」ワークショップが開かれた。以下にそこで得たいくつかの興味深い情報を列挙すると：(1) PSA では毎年投稿される約 190 本の論文のうち約 40 本が活字になる。それに対して、BJPS では約 300 本のうち 22 ~ 24 本。(2) 「書き直し」は学会誌では当たり前の事。過去の最も注目すべき論文のいくつかは、いったん却下された後、レフェリーのアドバイスに従って書き直しの上で再提出されたもの。ストレートに掲載が決まった論文でも大抵は改訂を経ることになる。レフェリーから不本意なコメントが来てもパニックになったり逆上したり放りっぱなしにしたりせずに、その問題について忍耐強く考えつづけること。ただしいったん書き直した論文は、他の学会誌に投稿することによって道が開けることも多い。(3) PSA では、認識論的・方法論的問題だけでなく、哲学的関心に導かれた科学史上の問題や、科学に関する倫理的・社会的あるいは政策論的問題を扱った論文も、本当のところは歓迎している。ただし残念ながら、後二者のタイプの論文は他のジャーナルに流れていくという伝統が定着してしまった。(4) 非英語圏からの投稿論文に関しては、英語の文章能力は最低限の基準が満足されていればいい。文章表現は採用が決まった後からでも改善できる。それよりも内容が重要であることはいうまでもない。特にそれぞれの国や地方に特有の、local で idiosyncratic な問題を掘り起こしたような論文を歓迎したい(以上終わり) 後に触れる大学院生の優秀論文奨励金にし

てもそうだが、積極的に若手を援助し発掘しているようにするアメリカの学会の強い姿勢を感じた。

PSA のセッションはすべからく平穩に終始し、エキサイティングな論争などはあまり見られなかったが、HSS の方のセッションでちょっと面白いものがあったので簡単に報告しておこう。それは英国ウォリック大学の Steve Fuller によってオーガナイズされた、“The Legacies of Thomas Kuhn” と名づけられたシンポジウムである。Fuller は近著 *Thomas Kuhn: A Philosophical History for Our Times* (Chicago, 2000) の中で、クーンが科学史・科学哲学に与えた影響を、社会構成主義的な Fuller 自身のアジェンダにとってはむしろ有害なものだったと総括して論議を呼んだが、このシンポジウムは期せずして、クーンを比較的肯定的に評価する他のパネリスト対 Fuller という構図になった。最初の話者である Thomas Nickles は、“Kuhn and the Agendas of History and Philosophy of Science” と題する報告において、クーンの著作には表れていない彼の歴史家・哲学者としての人となり、あるいは彼の経歴の特異性(例えばクーンの仕事が境界領域的なものであったために彼が受けたアカデミックな経歴の上でのハンディなど)といった biographical な側面に光を当てて、彼の業績の意義と限界を再検討しようとした。Peter Machamer は、“Scientific Normativity as Non-Epistemic: A Hidden Kuhnian Legacy” と題する報告において、「客観性・価値判断・理論選択」や「本質的緊張」といった論考(いずれも『本質的緊張』、みすず書房、所収)においてクーンが、アルゴリズム化できないような非認知的な価値が、科学理論の選択において規範的な役割を果たすことを強調した点に、クーンの知識論に対する最大の貢献を認め、STS 派の人々がこうした知識論的意義を過小評価していると論じた。Gonzalo Munevar も同様に、クーンが従来の検証主義、反証主義、ないし規範主義に導かれていた科学哲学を変革し、科学哲学者をして科学の歴史や実践により注意深く目を向けるよう仕向けた点を評価した。それに対して最後のパネリストと

して登場した Fuller は、上述の近著の序文で「ここ数年様々な会議に出席して私は、他の話者たちの思考を捉えているパラダイムに由来する彼らの議論の限界を診断するという役回りを演じるのを常としてきた」という意味のことを述べているまさにその通りに 上の三氏の報告に対して次々と「イデオロギー批判」的なコメントを加えていった。いわく、Nickles に対しては、「著書から切り離された個人的な美德で以って著者を称揚することは、ナンセンスだ」、Machamer に対しては、「クーンのより適切なイメージは知識論の変革者というよりも、彼を利用しようとするあらゆる陣営に対してその恣意的引用を拒まない『臓器提供者 organ donor』のそれである。実際、ポパーやラカトシュやファイヤーアーベントが軍部とか資本家といった彼らの政治的敵対者を批判することを厭わなかったのに対し、クーンは彼の言説がこうした陣営に利用されるのを黙認した」、Gonzalo に対しては、「科学哲学というディシプリン内部での意義はこの場ではもはや問題ではない」等々。Fuller の挑発的な議論に、他のパネリストの苛立ちが手に取るように伝わってきた。さらにこの後、コメンテーターの Paul Hoyningen-Huene が三人のパネラーの報告に対してこれまた容赦のない論評を加えていくという、まことに周到に企画されたシンポジウムだった。

その他にも HSS では、PSA がお開きになった翌日曜日の午前の枠にも、かなりの数のセッションが持たれていた。私は、“The Political History and Political Future of Philosophy of Science” という、論理実証主義の統一科学運動、特にその中心的な役割を果たした Otto Neurath の科学哲学の政治的影響について論ずるセッションに出てみた。なかなか刺激的だった。ノイラートが結構「大きな」哲学者であったことを再認識した。ここには前日の役目から解放された Fuller も来ていて、前日とは打って変わった穏かで好意的な口調でフロアーからコメントしていた。

さて、PSA の最終日の9日の閉会式では、まず実行委員長の Sandra Mitchell が今大会の参加者が PSA への登録者だけで340名はいたことを

告げ、次に次期会長の Elliott Sober による、会誌 *Philosophy of Science* への近年の投稿の中から選抜された優秀論文を執筆した大学院生に対する奨励金授与式が行なわれた。授与された小切手の金額はおおよそ250ドルほどだったと思う。受賞した論文のテーマは、バイズ主義的説明に関するもの、因果性に関するもの、相対論的量子力学に関するものなどだった。有望な大学院生を積極的に発掘するための経済的援助を惜しまないアメリカの学会の態度には見習うべきものがある。最後に、今大会を花道に会長職を退く John Earman の退任演説がなされた。個人的に、Earman さんはどんな気の利いたことを話すのだろうと思って楽しみにしていたが、蓋を開けてみると、量子場の理論における自発的対称性の破れが物理法則の理解にもたらす哲学的含意についての物理学の哲学の分科会の一報告としてなら文句のつけようがなかったかもしれない相当緻密な議論を延々と話し出し、少なからぬ参加者の忍耐力の限界を少々越えてしまったようだった。Earman さんもその場の雰囲気を感じたのか、だんだんと落ち着かない話し方になり、私もメモを取りながらどうなることやらと気を揉んだ

が、最後には無事演説を終了し私もほっとした。その後、歩いて10分ほど離れた所にあるディスカバリー・ワールドという科学博物館に場所を移して、レセプションが行なわれた。前日にもHSSと合同のレセプションが開かれたが、そのときは私は、Paul Griffiths とその友人の生物学の哲学者たちに加わってアフリカ料理を食べに行っていたので参加できなかった。ディスカバリー・ワールドでは、かなり狭いスペースの中に数百人の参加者が詰め込まれ、ごった返しの様相を呈していた。アメリカに1年あまり滞在して、こうした類の立食パーティーにもかなり慣れた。私は、ウィスコンシン大学やピッツバーグ大学の旧知の人々と駄弁ったり、以前千葉大学で科学哲学会があったときに知り合いになった、現在香港の嶺南大学にいる Neven Sesardic 氏と一緒に、実行委員長の Mitchell さんに「このすし詰めプログラムはもうちょっと何とかならないか」と冗談交じりの進言をしたりして、他愛無く過ごした。2年後の第19回大会は、テキサス州のオースティンで開催されるという。オースティンはミルウォーキーよりもずっと風光明媚な所らしい。次回は単なるオブザーバーではなく、是非スピーカーとして参加したいものだ。



会務報告

(2002.4.1 ~ 2003.3.31)

日本科学哲学会第10期理事会

第12回

日時：2002年6月22日(土) 13:30 ~ 14:30

- 議題：1. 新入会員、退会会員について
2. 2003年度大会について
3. 科研費出版助成申請について

第13回

日時：2002年9月14日(土) 13:30 ~ 14:20

- 議題：1. 新入会員、退会会員について
2. 決算報告と予算案について
3. その他

大学評価・学位授与機構への委員推薦について

ISAGA2003 後援について

D. H. Mellor 氏講演について

『科学哲学』36巻1号の発行時期について

第14回

日時：2002年11月9日(土) 12:00 ~ 13:00

- 議題：1. 総会について
2. 監査報告
3. 第36回大会実行委員長について

第15回

日時：2002年11月10日(日) 12:00 ~ 13:00

- 議題：1. 『科学哲学』35巻2号刊行報告
2. 次期編集委員長について

第16回

日時：2002年12月7日(土) 13:30～15:00

- 議題：1. 第35回大会報告
2. 新入会員・退会会員について
3. 2002-3年度編集委員について
4. 第36回大会実行委員について
5. 『科学哲学』の発行時期について
6. その他
大会参加費について

第17回

日時：2003年3月28日(金) 13:30～14:30

- 議題：1. 役員選挙について
2. 新入会員・退会会員について
3. 事務局の態勢について
4. その他
役員制度について

『科学哲学』35巻編集委員会

第3回

日時：2002年6月22日(土) 14:40～16:00

- 議題：1. 『科学哲学』35巻1号の刊行報告
2. 応募論文の審査状況について
3. 『科学哲学』35巻2号の編集について
4. 科研費出版助成申請について

第4回

日時：2002年9月14日(土) 14:40～16:00

- 議題：1. 『科学哲学』35巻2号(2002.11発行予定)の編集について
2. 応募論文の審査状況について
3. その他

書評論文について
公募論文の字数制限について

『科学哲学』36巻編集委員会

第1回

日時：2002年12月7日(土) 15:20～17:00

- 議題：1. 応募論文の審査状況について

2. 『科学哲学』36巻1号(2003.7発行予定)の編集について
2. 『科学哲学』36巻2号(2003.12発行予定)の特集テーマについて
3. 書評に取り上げるべき書籍について
4. 『科学哲学』の発行時期について
5. その他
論文の審査方法について

第2回

日時：2003年3月28日(金) 14:40～15:40

- 議題：1. 応募論文の審査状況について
2. 『科学哲学』36巻1号(2003.7発行予定)の編集について
3. 書評に取り上げるべき書籍について
4. 編集委員会の基本方針について

第35回大会実行委員会

第2回

日時：2001年6月22日(土) 16:10～17:40

- 議題：1. 特別講演について
2. シンポジウムについて
3. ワークショップについて
4. その他
ワークショップ資料のウェブ上公開について

第3回

日時：2001年9月14日(土) 16:10～17:40

- 議題：1. 研究発表について
2. 第35回大会のプログラムについて

第36回大会実行委員会

第1回

日時：2002年3月28日(金) 15:50～17:40

- 議題：1. 特別講演について
2. シンポジウムについて
3. ワークショップについて



会計報告

【2001 年度決算】

収 入：前年度繰越金	2,444,942
学会費納入	2,253,000
大会参加費	152,000
学会誌売上	106,732
預金利息	218
出版社著作権協議会分配金	65,000
合 計	5,021,892

支 出：34 巻 1 号制作費	411,920
34 巻 2 号制作費	460,920
ニュースレター制作費	73,760
第 34 回大会運営費	285,435
通信費	298,715
印刷費	200,245
消耗品費	62,806
委員会交通費	261,000
事務局費	142,715
アルバイト代・手数料	163,905
講演謝金	60,000
日本学術協力財団への寄付	10,000
小 計	2,431,421
次年度繰越金	2,590,471
合 計	5,021,892

【2002 年度予算】

収 入：前年度繰越金	2,590,471
学会費納入	2,200,000
大会参加費	150,000
学会誌売上	100,000
預金利息	200
出版社著作権協議会分配金	65,000
合 計	5,105,671

支 出：35 巻 1 号制作費	400,000
35 巻 2 号制作費	400,000
ニュースレター制作費	100,000
第 35 回大会運営費	300,000
通信費	300,000
印刷費	200,000
消耗品費	70,000
委員会交通費	270,000
事務局費	150,000
アルバイト代・手数料	170,000
予備費	2,745,671
合 計	5,105,671



学会・研究会予告

日本科学哲学会第 36 回大会

【期日】2003 年 11 月 15・16 日

【場所】千葉工業大学

【場所】大阪大学

【詳細】<http://www.iamas.ac.jp/~yoshioka/jass/>

日本哲学会第 62 回大会

【期日】2003 年 5 月 17・18 日

【場所】東洋大学

【詳細】<http://wwwsoc.nii.ac.jp/phil/>

日本認知科学会第 20 回大会

【期日】2003 年 6 月 6 日～8 日

【場所】電気通信大学

【詳細】<http://logos.mind.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/>

科学基礎論学会総会

【期日】2003 年 6 月 14・15 日

【場所】東北大学

【詳細】<http://www.phsc.jp/>

日本生命倫理学会平成 15 年度年次大会

【期日】2003 年 11 月 15・16 日

【場所】東京大学・上智大学

【詳細】<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jab2/>
事務局（〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学 生命科学研究所 生命倫理部門内 TEL & FAX. 03-3238-3443）にお問い合わせ下さい。

日本記号学会第 23 回大会

【期日】2003 年 5 月 10・11 日

海外の学会情報については、以下のサイト、及びそれらからのリンク等をご参照下さい。

- EpistemeLink.com Philosophical Events
http://www.epistemelinks.com/Main/MainEven.aspx
- The Philosophical Calendar
http://www.crvp.org/Philosophical_Calendar/

- Conference Alart
http://www.conferencealerts.com/
- The American Philosophical Association
http://www.apa.udel.edu/apa/index.html



寄贈図書紹介

2002年4月1日～2003年3月31日

野本和幸・山田友幸編
『言語哲学を学ぶ人のために』 世界思想社

伊勢田哲治著『疑似科学と科学哲学』
名古屋大学出版会

ジョン・A・ムーア著、青戸偕爾訳
『知のツールとしての科学 - バイオサイエンスの基礎はいかに築かれたか 上・下』
学会出版センター

『紀要 哲学科』第45号 中央大学文学部

『大学教育学会誌』第24巻第1号、第2号
大学教育会



『科学哲学』バックナンバー在庫一覧

タイトル	定 価		定 価
4 (1971年)	1,200円	23 (1990年) 科学哲学の未来を問う	1,800円
5 (1972年)	1,000円	24 (1991年) 異文化理解の基礎	1,800円
6 (1973年)	非売品	26 (1993年) 科学的説明	2,000円
7 (1974年) 記号・情報・論理	1,300円	27 (1994年) 量子力学と物理的实在	2,000円
8 (1975年) 行為の理論	1,300円	28 (1995年) カオスをめぐって	1,200円
9 (1976年) 様相論理学	1,300円	29 (1996年)	1,800円
10 (1977年) 心身問題と道徳	1,300円	特集1 デュエムの科学哲学の現代的意義	
11 (1978年) 解釈とモデル	1,500円	特集2 サイバネティクス	
12 (1979年) 言語と非言語	1,500円	30 (1997年) 近代における科学と哲学	1,500円
13 (1980年) 社会科学と哲学の間	1,500円	31-1 (1998年)	1,500円
14 (1981年) 論理とは何か	1,600円	31-2 (1998年) 生物学的説明	1,500円
15 (1982年) 科学哲学の展望	1,600円	32-1 (1999年)	1,500円
17 (1984年) 合理性とは何か	1,700円	32-2 (1999年) 医療の哲学に向けて	1,500円
18 (1985年) 志向性について	1,700円	33-1 (2000年)	1,500円
19 (1986年) 言語理解	1,700円	33-2 (2000年) 心・生命・コンピュータ	1,800円
20 (1987年) 意識・機械・自然	1,700円	34-1 (2001年)	1,500円
21 (1988年) 私 の同一性	1,700円	34-2 (2001年) 進化論から見た心と社会	1,500円
22 (1989年) 科学と反 - 实在論	1,800円	35-1 (2002年)	1,500円
		35-2 (2002年) クワインの哲学	1,500円

購入を希望される方は、事務局宛ご連絡下さい。(1～3巻、16巻、25巻は在庫切れです。)



事務局からのお知らせ

1. 役員選挙のお知らせ

第11期の役員選挙が行われます。選挙権のある会員の方々に、選挙公示、投票用紙、返送用封筒を同封いたしましたのでご確認下さい。よろしくご投票をお願いします。

2. 学会費納入のお願い

2003年度分の学会費をお納め下さいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さいますようお願い申し上げます。なお、「-」表示の方は完納となっております。



編集後記

まだ私がニュースレターの編集委員をやっております。実務はすべて事務局がやってくれますので、私の仕事はこの編集後記を書くだけという不思議な役目です。実のところ仕事は他にもありまして、海外学会報告などの記事をどなたかに依頼するというのもっとも重要な任務なのですが、欣喜雀躍したことに、依頼するまでもなく、申し出ていただけました。前回の坂本秀人さんと、今回の松本俊吉さんです。私といたしましては、そういうわけで、幸せをかみしめているところです。しかし、ふと思ったことなのですが、この幸せは、何もしなかったことによる幸せなのです。何かをしなくちゃいけなかったのだけれど、しなくてよくなったのでとっても幸せ、というわけです。これをうまく使えば、部屋の中でぼーっとしていながら、いくつもの幸福を味わうことができるはずですが、とはいえしかし、たしかライルが、「回避した交通事故をリスト・アップすることはできない」という趣旨のことを書いていたかと思えます。そんなものなのでしょうか。それで、ある人にライルのこの話をしたら、その人はけっこうたくさん人生を生きてきたけれど独身という人なのですが、「回避した結婚ならいくつでもリスト・アップできる」と言い放ちました。はあ、これもまた、そんなものなのでしょうか。

(野矢茂樹)

日本科学哲学会ニュースレター No. 24 2003年5月20日

編集兼発行 日本科学哲学会

事務局 〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1
東京都立大学人文学部哲学科内 日本科学哲学会
Fax. 0426-77-2073【宛名「日本科学哲学会」明記のこと】
e-mail. philsci@comp.metro-u.ac.jp
URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/pssj/index.html>

印刷 文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南1-4-1